
笑い男は笑わない

ハヤハヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑い男は笑わない

【Nコード】

N3986I

【作者名】

ハヤハヤ

【あらすじ】

笑い男という少女連続殺人犯がいました。

笑い男のターゲットが、笑い男より先に何者かによって殺されま
す。

しかも笑い男の犯行の手口を真似て………困惑しながらも
その犯人を捜そうとする笑い男。

逆にその犯人と思われる何者かによって、拉致されてしまうのだ
が………

0

少女連続殺人事件。

死体の口を切り裂き、まるで笑っているかのように施す。

その残虐性と特異性から『笑い男』と名づけられたシリアル・キラーがいた。

1

午後八時三十五分頃

笑い男の五番目の被害者となるはずの少女は、とある住宅街に住んでいた。

わたしは住宅街近くの公園で、その少女『川原ともみ』の死体を発見した。

死体は公園の茂みの陰に、あおむけに倒れていた。

首にはロープが何かで縛られた後があり、口は刃物で引き裂かれていた。

目は驚愕に見開かれてはいるが、口の端が斜めに引き裂かれ不気味に笑っているかのように見える。

まるで笑い男の手口であった。

しかし、絶対に笑い男の犯行ではない。

何故なら、わたしが『笑い男』その人だからだ。

『川原ともみ』はわたしのターゲットであった。わたしは彼女の行動パターンを

入念に調査し、今日はその決行日だった。彼女はこの時間帯に

人気の少ない公園の前をいつも通っていた。わたしはそこを狙うためこの公園に来たのである。そこで彼女の死体を発見してしまったのだが

まず思ったことは、先を越されたという怒り。その後一体誰が？という疑問だった。

ただの模倣犯なのか？ それとも……

そんなことを考え、どれくらい時間が経っただろう。長いようで短いような

実際は五分と経っていなかったかもしれない。

わたしは我に帰り、すぐに立ち去らなければ、と思った。

自分の犯していない犯罪で捕まるほど、バカらしい事はないと思っただけである。

だがもう時すでに遅しであった。

公園の入り口の方から人が近づいて来るのが見えた。

「どうかしましたか？ 大丈夫ですか……」

と少し遠慮がちに声を掛けてきた。

わたしは焦った。だがこれはわたしが殺したんじゃない

逃げる必要は無い。と思い直し

「人が死んでいる！ 警察を呼んでください」

と大声で叫んだ。

するとその人影は一瞬立ちつくすが、直ぐに体を反転させ公園の入り口の方へ駆け出して行った。

2

翌日、わたしは『川原ともみ』の告別式に出るため洋服タンスから黒いスーツを取り出して着替えた。

姿見鏡の前に立つ、似合っていない。

顔はムクんでいるし、腹も出てる。小太りの不細工……

これがわたしの自己評価だ。

まあ外見なんてどうでもいいか。そう思いながら告別式に出かけることにした。正直告別式なんかに行きたくはなかったが色々周りがうるさいし、少しこの『川原ともみ』を殺した犯人に興味も出てきたからまあ良しとしよう。

わたしの勘では、確実に犯人は告別式に顔を出すはずだ。こういった勘をわたしは外したことが無かった。

3

これも刑事としての仕事だからしかたないが、正直俺は辛気臭い場所は苦手だ。

斎場の入り口で、名簿に『笹山敦』と明記して中に入って行った。告別式斎場は沢山の人々で埋め尽くされていた。

その大半がマスコミの連中だ。

それを見て、不精ヒゲの生えた顎を擦りながら俺は呟いた。

「ハゲタカどもが」

あいつらのせいで、事件がややこしくなることは多々ある。

今回も笑い男の犯行だと、勝手に報道しまくりやがって

『笑い男』というネーミングもあいつらが勝手に付けたものだしな。

まったく、と軽いため息を付いたその時、俺の視界の端に見た顔が横切った。

喪服があまり似合っていない、小太りな青年だった。

あれは確か第一発見者の青年……

律儀に告別式に出るとは殊勝な心がけだな。と思いき少し見ていると妙に周りを気にしてる？ というか何かを探してる様に見える。

怪しい。だが通常、第一発見者が犯人なんてことはまずありえない。

何故なら、普通は犯行現場をいち早く離れようとするのが
犯人の心理だからだ。だがしかし彼が『笑い男』 シリアル・キ
ラー

なら犯行現場に長時間いたとしても、あながち不思議ではないのか
もしれない。

少し様子を見るか……

告別式は滞りなく進んで行った。

最前列に座っている頭が少し剥げた男、あれが父親か
肩を落とし自分のクツのつま先しか見ていない。

その隣では遺影を持った母親が泣き崩れ、さらに隣には
その遺影に似た顔の女性が、死んだような目をしたまま佇んでいた。

『川原ともみ』の確か姉だったかな？

式が進んで行く中でも、例の青年はたまたま顔を上げては
キョロキョロと周りを伺っている。そして何かを見つけたのか
彼はニヤリと薄気味悪く笑った。

俺はこいつから目を離すまいと心に誓った。

4

告別式を終え、わたしは一旦家に帰ることにした。
わたしの勘は当たっていた。多分アイツが犯人だ。
そんなことを考えながら道を歩いていると
急に後ろから声を掛けられた。

「きみが笑い男だな」

わたしはビクツと体が跳ねるほど動揺した。

そして慌てて後ろを振り向こうとしたが、首筋に強烈な衝撃を感

じた。

と同時にわたしの目の前は真っ黒に染まっていた。

5

気が付くと、そこは薄暗い倉庫の中のような場所だった。

わたしは椅子に座らされ、手は後ろに回した状態で縛られおり
両足も足首のところまで縛られた状態だった。

「痛っ」

後頭部に鈍い痛みを感じ、自然に眉間にシワがよる。
幸い口は塞がれていないようだ。すると奥の方から
人が近づいてくる気配がした。

「気が付いたかい？」

彼は少し心配するかのよう問いかけてきた。

6

「最高の目覚めって感じではないね」

わたしの皮肉に苦笑しつつ、彼は

「それくらい元気なら大丈夫そうだ。スタンガンって加減が分から
ないんだよね。」

犬や猫には試したけど、人に使うのは初めてだからさ」

と言いながら、近くにあった椅子を引っ張り出し

わたしの正面二メートルほど先に座った。

そして喋り出した。

「『笑い男』にこれ以上近づくのは、例え両手足縛っているから
って賢くない。」

それにこの距離だと僕の顔も見えるだろ？」

「ああ、よく見えるよ。やっぱりアナタでしたか、第一発見者の
たしか名前は榎本さんですね」

わたしは質問に答えた。

「感激だな。笑い男に名前を覚えてもらえるなんて。だけど僕は第一発見者では
ありませんけど。きみが本当の第一発見者だ。僕はきみに声を掛けただけですからね」

榎本は心底嬉しそうに、小太りな体を揺らしながら話した。

「何故あの時、わたしのことを警察に言わずに、自分が第一発見者だと証言した？」

それにわたしが『笑い男』だと分かっているのに、何故警察に引き渡さず

こんなことをするんだ？」

わたしはあの時のことを思い出しながら、ただ純粹に疑問を口にした。

結局あの時、榎本が公園を去った後わたしは逃げた。

何故かというと、あの時わたしのカバンの中にはいつもの凶器が入っていたのだ。

もし駆けつけた警察に、持ち物検査でもされれば一貫の終わりであった。

それに幸い夜の暗がりということもあり、榎本にわたしの顔は見えていないだろう……

という単純で、しかし今考えれば浅はかな理由からであった。そんな回想を断ち切るように、榎本は話し出した。

「ぼくはきみの……いや笑い男の大ファンなんですよ！ 僕はあのときみが逃げたから

最初普通に怪しんだ。もしかや犯人？ まさか笑い男？ と思考を重ね、結局警察には黙ってました。そしてそれは正解だった。告別式

できみを見たとき確信した。

きみが『笑い男』だとね」

さらに榎本は興奮したように話し続けた

「自宅とは別にこの倉庫を借りたのも、きみのために借りたような物ですよ。

数年前から親戚に格安で借りてるんですけどね。きみが事件を起こすたびに

よくここに籠って情報をネットで集めたり、事件の載っている雑誌や新聞を

切り抜いたりしたものですよ。懐かしいな……

最近は何事もなく寂しかった。だけど夢がかなった！

笑い男と二人っきりで話ができるなんて」

「それは光栄だね」

わたしは心底どうでもいいように答えた。

なるほどなるほど、そうゆうことか、大体の合点はいった。

しかし、彼はかなりイツちゃってる。わたしも人に言えないけどね。

ふむ、すると合点がいかないのは後一つか二つくらいかな。

まあそれが最大の問題なんだが……

などと思考に耽っていると

「しかしまさか……こんな美人な女性が『笑い男』だとは思わなかった。

『川原ともみ』のお姉さんの『川原ともよ』さん……」

榎本は、まわり付くような笑顔でわたしに向かってそう言った。

「こちら笹山！ 応援を頼む！」
車に備え付けてある無線機に向かって叫んだ。
まさか、いきなり犯行に及ぶとは思わなかった。

しかも見失ってしまうとは……手柄を一人占めにしようとした報
いか

クソッ！

俺は無線に向かって続けた。

「先日の事件の第一発見者『榎本和也』が女性を誘拐、車で逃走
中。

女性の方、あれは多分先日の被害者の姉だ。

現在位置は告別式斎場から駅の方角に約三百メートル。

そこで見失ってしまった……奴の車種は黒いワゴンR、ナンバー
は不明

付近の搜索と検問を要請する。俺は奴の自宅のほうに向かう」

それだけ言い捨て車を急発進させた。

必ず俺が捕まえてやるぞ。笑い男め！

7

「『川原ともよ』 妹より五つ年上の二十一歳。駅前近くのマ
ンションに一人暮らし

仕事場はそのマンションの近くで、貿易関係の会社のOL、彼氏は
いないって。

美人なのにどうしてかな？ その突き放した喋り方が原因かな？
そういえば喪服もパンツスーツだし……男に憧れているとか、男に
なりたいたいという願望でもあるのかな？」

榎本はニヤニヤしながら言った。

「昨日今日でよく調べるものだ。それとわたしが美人だと？ バカバかしい……」

わたしはデブで不細工さ。自分のことは自分がよく分かっている。それにこのしゃべり方は地でね。さすがに家族の前や会社などではそれなりの言葉使いで喋ってるよ。後、別に男になんて憧れたりはない。

スーッだって細く見せるための苦肉の策さ」

わたしは自嘲気味に言う。すると

「調べるのは得意なんでね。それはさておき、きみは自分を過小評価しすぎだ。」

たしかに妹さんと比べれば少しポツチャリしてるが、それぐらいの方が好みという男性はいくらでもいるぞ。顔もふっくらして女性的だ。目も大きいしその他のパーツも

整っている。誰が見ても美人の類に入るだろうし、全体的に見ても全然デブじゃない」

榎本は何故か必死にまくし立てた。まあそんなことを言われてもわたしは絶対に信じはしないけどね。

そんなことより本題に入ろう。

「そんなことより、榎本さん。アナタが妹を殺したんだろう？」
すると榎本は呆気にとられた表情になった。嘘を付いている様には見えなかった。

「いや、僕は殺していない。え？ きみが殺したんじゃないの？」

わたしは困惑した。榎本が犯人じゃない？ 勘が外れた！？

そんなことを考えながらも

「アナタは笑い男に興味を持ち、最近事件が無いことに悲観して

いた。

それでついに自らが犯行に手を染めてしまう。そこにちょうどわたしが公園に来て

死体を発見する。アナタはその様子を公園の外から観察し、何故コイツは死体の前でじっとしているのかと不思議に思った。それで何食わぬ顔で話しかけてみる。そこでやっと反応するわたしを怪しみながらも警察に連絡し、戻ってくるとその姿はない。

これは決定的だと確信してわたしが『笑い男』だと看破したんじゃないのか？」

わたしは一応道筋だった推理を口に出してみる。

榎本は苦笑しながら顔を横に振った。

「違う違う。そんな偶然に偶然が重なったようなことが、普通に起こると思うのかい？」

「いやしかし、偶然という意味だとアナタが公園でわたしに話しかけたのも、偶然じゃないのか？」

「違うね。あれは偶然じゃない」

榎本は真顔で言った。

わたしは驚愕しながらも、それを表情には出さないように「どうということだ？」

と聞いた。

「犯行予告がネットに流れていたんだ。『笑い男』のホームページにね。」

曖昧な犯行場所と時間しか書かれていなかったけどね。まあよくあるイタズラ

だろうとは思ってたんだけど……一応万が一ということもあるしね。その時間帯に

そのあたりをウロウロしてたのさ」

得意げに榎本は言った。

インターネットでも『笑い男』は有名らしい。
まさかホームページまで在るとは恐れ入った。しかし誰が犯行予告などしたのか？

間違ってもわたしはそんなことはしない。それは置いて、もう一つの疑問を問う。

「なるほどね。それであるの公園に来たのか。」

それはいいとして何故、告別式でわたしが『笑い男』だと確信したんだい？」

すると榎本は、良くぞ聞いてくれたとばかりに、嬉しそうに語りだした。

「何の取り得も無い僕だけど、一つだけ誇れるとすればこの耳の良さだ。」

一度声を聞けば、どんなに声を変えても判別できる自信があるよ。告別式の時に落ち込む父親や泣きじゃくる母親。そんな両親の代わりに挨拶した

きみの声　それが決め手さ。

まあそれだけだとあの公園にいたのが、きみだという確信ができただけだ。

しかし少し考えれば、何故声色まで変えて叫ぶ？　何故妹の死体から逃げる？

それにあの告別式でのきみの表情……それらを総合すれば答えは明白さ」

それはさすがに予想外だった。まさかそんなことでバレるとは、公園で叫んだ時の声と

挨拶の時の声は、まったく別人の声だという自信があったのに……

だがわたしは気を取り直し

「まあ疑問も残るけど、大体のことは納得した。それで決局この後どうするのかな？」

と榎本に最終告知をした。

「どうしようかな？ それを僕も考えてるところさ」

と椅子を揺らしながら、わたしをいやらしい目付きで眺めつつ

榎本はそう言った。

その時わたしは決意した。

この男は殺そう。

8

僕は椅子を揺らしながら、彼女を眺めた。見れば見るほど美しい。そして妙にそそられる表情と良い肉体をしている。

意識しなくともそのような目付きで見ってしまう。

僕はそんな下心を隠しめせず欲望に忠実に、行動を起こそうかと考えていた。

その時

「ぐっ、くう」

と彼女は顔を下に向け痙攣しながら唸りだす。

僕は焦りながらも、無闇に近づこうとはせず彼女に声を掛けた。

「おっおい。どうしたんだ、大丈夫か？」

すると彼女は何事も無かったように、顔を上げて僕の方を見つめた。

だが その彼女と目が合った時、僕は背中に液体窒素でも流されたか様に

体が強張った。それと何故か座っていた椅子ごと後ろに下がろうと
していた。

上半身は動かないのに足は勝手に動く……本能が逃げると言っ
ていた。

彼女の見た目は何一つ変わっていない。しかし彼女の周りの雰囲気
気というか

オーラとでもいうのか、それが先ほどとはまるで違う。

中身がまったく別の何かに変わってしまったように感じられた。

背中には冷たいものを感じながらも、嫌な汗が急に全身に流れ出
す……

そしてその別の何かが口を開いた。

「理想的だ。まさに理想的な環境と配置だな」

意味不明な言葉。

さらにこちらに初めて気付いたかのように目を細め、僕を見ながら
「やあ、初めまして。榎本君。自己紹介しよう。私が『笑い男』
だ」

と言い放った。

僕が呆然としていると

「うん。まあ榎本君に解りやすく言うと、多重人格という奴さ。

まあ正式には解離性同一性障害というやつかな。

わたしに限っていうと、厳密には違うのだけどね」

まあ似たようなものさと、笑い男はサラッと言った。

嫌な汗は止まらない。いや一層激しく体を濡らす……だけど『笑
い男』という

言葉に、僕の頭と体は意思に反して興味を示す。

これが本物の『笑い男』なのだと思慮も無く分かってしまったの
だ。

こちらの考えなど、お見通しの様な表情で笑い男は語り出した。

「そんなに畏まらないでくれ。私の話が聞きたいのだろう？
話してあげるよ。いくらでもね」

中性的な美しい声。恐ろしくも何故か安心してしまう……
その事実にも更に恐怖してしまう。

陳腐な表現になったしまいが、悪魔というものが存在するとすれば
こつゆう者なのだろうと安易に想像してしまう。
それほどに笑い男の存在感は大きかった。

しかし、僕はそれに飲まれないように、気持ちを無理やり落ち着
かせ

気を取り直すように椅子に座り直し、笑い男に向き合い話を聞い
た。

「彼女はね。この体の持ち主である『川原ともよ』のことだけど
……

彼女は今まで一人として人を殺してない。殺意はあるんだよ。

計画も段取りも彼女がするのだからね。しかしいざ人を殺そうと
した時

彼女は殺せなかった……だからその時私が 『笑い男』 が生まれ
た。

彼女は私の存在には気付いていない。

だが自分が 『笑い男』 だという自覚はあるのさ。

それ以来、人を殺す瞬間は全て私の仕事になった。

これがどういふことか榎本君には分かるかな？」

まるで学校の先生かのように、優しく問うてきた。

僕は生徒のように緊張しながら答える。

「彼女が……『川原ともよ』が僕を殺そうと思ったってことかな
？」

「そういうことだ。榎本君はやはりなかなか賢い。先ほどから私も『川原ともよ』の中で話は聞いていたが彼女より榎本君のほうが数段やり手だね」
笑い男は嬉しそうに大きく頷きながら言う。
それを聞いて僕はとても嬉しい気持ちになっていた。
……ヤバイだろそれ、と心の中で自身にツッコんでいるとそんなことにはお構いなしに笑い男は続ける。

「でも安心してくれ。私は榎本君を殺そうなんて気はサラサラ無いんだよ。」

というか、彼女はもう終わってしまったているんだよ。何故かと言うとね……

彼女が人を、いや少女を殺し出した原因は妹に在ったのさ。
よくあるトラウマってやつさ。彼女は幼少のころから
事有るごとに妹と比べられてきた。

そして自分は妹より太っていて醜いと勝手に思い込んでいった
そうこうしている内に、自分より若く細く可愛いと思う少女全般に
殺意を抱くようになった。何故そんな殺意を抱くのか
彼女は原因が分からなかった。しかしその殺人衝動は抑えきれなくなる……

数人を殺してやっと原因が分かる。バカだろう？

そして最後のターゲットである妹を殺そうとした。

だがさすがに肉親を殺すのには、無意識にもかなりの抵抗があったのだろうね。

そのほとんどの行為を私に委ねてしまった。
確かに妹を殺したのは私であり彼女だ。しかし彼女は妹を殺したことに気付いていない。気付かないまま彼女の殺人は全て終わってしまったのさ。哀れなもんだ。

彼女が感じた告別式に犯人は来るといふ勘も、あながち間違っ
はいなかったのかな」

話し終えた笑い男は、うつむき少し悲しそうな表情をしていた。

それに反し僕は興奮していた。歓喜に体が打つ震えそうだった。全ての謎が分かったかのような爽快感、笑い男本体の彼女さえ知らない話の顛末を

僕は知ってしまったのだから。

そんな興奮覚め止まぬ僕を、笑い男は顔を上げ微笑みながら見つめ
「そこで榎本君に折り入ってお願いがあるんだ。聞いてくれるかな？」

と言ってきた。僕は無理やり警戒心を取り戻しながら言った。

「内容によりますね」

「大丈夫。榎本君の夢をかなえてあげよう。なに簡単なことさ。

私の、いや彼女の持っていたカバンがあるだろう？ その中にいつも犯行に

使っていたロープとナイフが入っているはずだ。

それを使って私を殺してほしい。ロープで首を縛って殺し、ナイフで口を切り裂くのさ。

榎本君ならできるさ。正直私は疲れた。彼女ももういいだろう……何者かになりたかったのだろう？ 榎本君が後を継いでくれ。

君が『笑い男』になるんだ」

笑い男は笑っていた。

僕は倉庫の隅に置いてあった、彼女のカバンからロープとナイフを取り出した。とその時

倉庫の入り口と裏口、両方ドアを乱暴に叩く

けたたましい音が倉庫中に広がる。その音に混じり

「警察だ！ 榎本和也！ おとなしく出て来い。この倉庫は包囲している！」

逃げ場はないぞ」

という荒々しい声が響いた。

僕は急いで笑い男に走り寄った。すると笑い男は「今から急いで首を絞めて私を殺し、口を切り裂く時間はあるかな？」

と笑顔で聞いてきた。僕は右手にナイフ、左手にロープを持っていた。

その左手のロープを捨て、ナイフを両手に持ちながら言った。

「僕はもつと手っ取り早い方法で、終わらせようと思っています。それには笑い男さんに、一つ約束してほしいことがあるのですが

……いいですか？」

「内容によるね」

笑い男は微笑みながら言った。

「もう殺人はしないと約束してください」

僕は真剣に願う。笑い男も真顔で

「約束しよう」

と言った。最後に僕は訊いた。

「こうなることは、全て笑い男さんの計画通りなんですか？」

笑い男は少し悲しそうに言う。

「そんなことはないさ」

その言葉を訊いた後、僕はナイフを持った両手を大きく振りかぶった。

9

ドアを打ち破る轟音が倉庫中に響いた。それに伴い大勢の足音が押し寄せてくる。

『榎本和也』は私の足元に倒れていた。自らの首にナイフを突き刺して……

榎本君の最後の言葉には、正直私もドキリとさせられた。やはり榎本君はなかなか賢い。

そう。君が言った通り　全て私の計画通りだ。

『榎本和也』という存在を私は前から知っていた。

ホームページに犯行予告をしたのも私だ。

そのホームページを運営しているのが、榎本君だということも前から知っていた。

この倉庫の存在も知っていた。数ヶ月前に倉庫の存在を知ったのは本当に偶然からだったのだが、その時から私は計画を練りだした。

全ての事件についての細かい資料が、この倉庫に点在している。

榎本君が集めた物も

あれば、私がこの数ヶ月の間に持ってきた物もある。

それに決定的物証にも君の指紋が付いた。君の首にも刺さっているがね。

榎本君があの時、公園の近くをうろついているのを発見したときに私は七割ほど計画の成功を確信した。

君が告別式で刑事に目を付けられていたのも確認済みだった。

後はそう……くだらない話で時間稼ぎするだけだったのさ。

賢い榎本君のことだ。追い詰められた時こう考えたのだろう？

笑い男がこれ以上殺人を犯さないなら、自分が全ての罪をかぶり自殺することで

自分が『笑い男』として世に名を残せる　とね。

まさにそれこそが私の計画だとは……

まあ最後の最後には分かっていたのかもしれないね。

しかし、理想的な終わり方で良かったよ。彼女の殺人衝動も終了した。

私の存在も彼女が新しい殺人衝動にかられるまで、しばらくは眠りにつくだろう。

君は賢い人間だった。

しかし、詐欺にかかる人間は往々に、賢い人間だと相場は決まっているものだ。

とそんなことを思考しているうちに、警官達に囲まれていた。

「大丈夫か？ 怪我はないか？ もう安心だぞ」

などと手足の縄を解きながら、話しかけてくる。

私はそんな警官達を無視し、足元の死体を見つめながら周りには聞こえないほど小さな声で呟いた。

「君の顔に笑顔を施せる者は、もうどこにもいないよ」

(後書き)

ハヤハヤと申します。

初投稿です。

当方完全な素人なので

稚拙な駄文だとは思いますが

読んで貰えるだけで十分幸せです。

それではよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3986i/>

笑い男は笑わない

2011年1月20日15時04分発行